

図書館だ！印象派

散歩がてらにふらり立ち寄ると、かなりの確率で休館日だったといふのはよくある話で、その日、ドーナツの穴のような磁场が形成されて誘引力がはたらくのだ。図書館は、老若男女 Everybody が行き交うカルフール、千客万来なれば本も喜々、知識も伝播されて萬歳。ひょうたん鮓の「図書館だ！印象派」、どこまで続くや。

高松市中央図書館
Takamatsu City Chuo Library

菊池寛記念館
Kikuchi Kan Memorial Museum

歴史資料館
Historical Museum

サンクリスタル高松

印象派

ひょう
たん鮓



図書館だ！



ヤフーブログからセレクト転載、スナップ印象派、ツイッターノベル、おもしろ印象派などジャンルいろいろ、オリジナル写真も多数掲載して、よみやすいe-hon（閲覧無料）です。ダウンロードもOK！URLからアクセスしてぜひ。

Pubooブログ e-hon『ひょうたん鰯』（13Titleから増殖中♪♪）

<http://p.booklog.jp/users/axros03>

下記は閲覧ページの一部です、ダウンロードしてお暇なときにお読みください。

△140字物語 ひょうたん鰯

<http://p.booklog.jp/book/118396/read>

ひょうたん鰯：1

<http://p.booklog.jp/book/19047/read>

ひょうたん鰯：2

<http://p.booklog.jp/book/34561/read>

おもしろ印象派

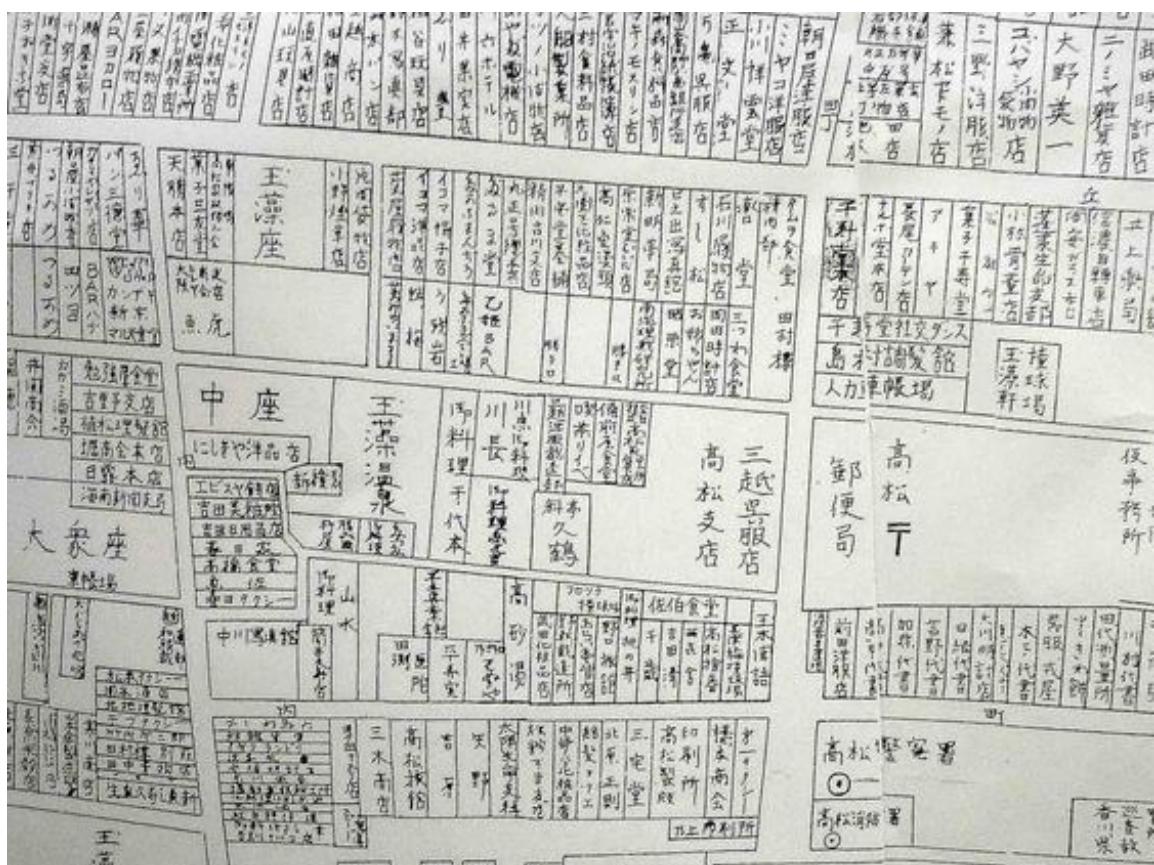
デジ撮！オリジナル「新・おもしろ画像」と「印象記」ア・ラ・カルト。珈琲タイムに、見て読んでニュートラルなひとときを、ぜひ！

<http://p.booklog.jp/book/19408/read>

スナップ印象派：1

<http://p.booklog.jp/book/61780/read>

昭和8年（1933）の高松市街図



昭和8年（1933）の高松市街図

図書館*の企画展で、昭和8年の高松市内住宅図が拡大して貼り出されていた。

ここに引っ越してきたのがほぼ40年前、

その時代、現在のわが家の敷地には何が建っていたのか、ご近所は？

などと、『二番丁小学校』を目印に探したが分からなかった。

もう一遍行って手縲（たぐ）ってみると・・・とりあえずサイトへ行くと。

二番丁小学校（新番丁）のポリシーがいい、シンプルにして愛がある！

児童像

考える子

やさしい子

元気な子

：

できょう、予約DVDが用意出来ています、と図書館からメール。

午後になって受け取りに行くと、

拡大市街図の前で一人おばさんが覗きこんでいる、

その横で同じく覗きこもうとした私に

「どこでしたかしらね、『姥ヶ池』（ばあがいけ）」

「さあ、墓地の下一帯の盆地みたいな土地やけど、

昭和8年はまだ埋め立てしてなかったでしょ？」と、私も一緒に探した。

栗林公園から手繰っていって、

それらしき場所に池が一つ、大きな穴を開けているのを発見、

周囲（西手）は田んぼばかりだ。「多分ここでしょうね」と私。

「当時、高校（明善）前駅とかがあって、電車が走っていたんですよ、

記憶にありますね、コトデンでなく」と件（くだん）のおばさん。

しかしこの地図、探し当てづらいと思ったら“南が上”じゃないか。

ちょっと身体を捻（ひね）って、頭の中で“海を上”に置いて考えるよな。

：

ネットに地図データがアップされていた、拡大もOKだ！

香川県立図書館デジタルライブラリー【高松住宅明細地図】昭和8年

<https://www.library.pref.kagawa.lg.jp/digitallibrary/sonota/ezu/detail/DE00610.html>

歴史年表

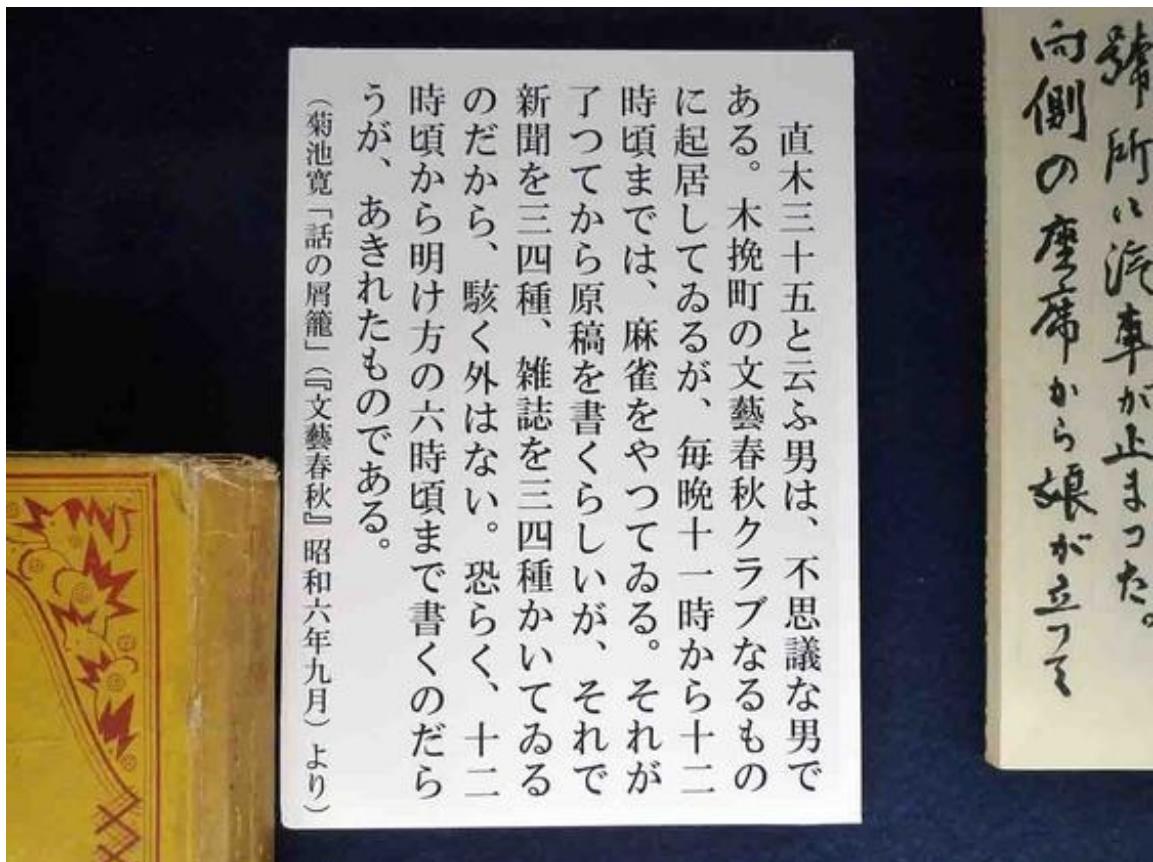
：

昭和6年　満州事変

昭和7年　上海事変、満州国成立、五・一五事件

昭和8年 国際連盟脱退

図書館*＝高松市中央図書館



菊池寛と直木三十五と麻雀と

麻雀（Mahjong）・・・。知的ゲームで賭博性があり、しかも卓上の闘いに人間性がさらけ出される。ちょっとばかし怖い遊びなのだ。戦後、本格的に流行り始めた麻雀、最初に飛びついたのは大学生やサラリーマンだったが、またたく間に社会を席巻して一大ムーブメントを。麻雀が強い人、弱い人というヒエラルキー（階級）が暗黙裏に形成された、少なくとも感じていた。大正から昭和の同時期を生きた菊池寛*1と直木三十五、その関係は社主（文藝春秋）と物書き（小説家）というもので、確固とした上下があったが麻雀では、さてどうだっんだろう？といった推測（考察）*2をもって書いたのがこのツイノベ（＝140字小説：小話）だ。

*1 日本麻雀連盟の初代総長にして重鎮（鈍重という意味もあり）と称されているが、麻雀が上手い訳ではない（と理由もなく確信している）。総裁は名誉職、よろこんで拝命する、と本人も述懐している。ちょっとおっちょこちょいなルックス（私だけの主観）の菊池寛は、明治21年（1888）、香川県高松市生まれ、小説家、文藝春秋社を興している。同時期を生きた人に芥川龍之介、直木三十五など。

*2 麻雀のつよいオトコに畏怖の念を抱く。菊池と直木は麻雀（賭け）をしていた、負けていたのは菊池だった。

Chapter①

直木賞

ロンだそれ、ダブル役満、天井なしで三十五万点だぜ！またかよ直木、おればっか狙い撃ちしてんじゃないの？んなことねえよ菊池、てめえがヘタなだけだ、さあ精算しよか。ちょっと待て、今度拵える文学賞の一つにお前さんの名前付けるからさ、それで麻雀の負けをチャラにしろよ、

直木賞だぜ、なあ。 #twnovel

:

Chapter②

三十五

菊池が捨てた白（はく）を鳴き返して、次順、發（りゅうは）を暗槇（あんかん）、嶺上開花（りんしゃんかいほう）！「自摸（つも）ったよ、菊池の責任払い、逆転だぜ！」「大三元、字一色（つーいーそう）。明槇（みんかん）も一ヶありで、青天井だ」

よせよ三十三、あついまは、三十五だっけな。 #twnovel

:

Chapter③

それでチャラに

『白發』と鳴いて直木、『中』を手牌出し。続いて菊池が切った『中』を鳴き返して大三元を自摸！菊池の責任払いトッピング逆転だ。

「さあ精算しようぜ、菊池」「待ち合わせがねえなら、こんどの文学賞に『オレの名前』を付けろや、それでチャラにしてやるぜ」「なに『直木賞』ってか？」 #twnovel

:

Chapter④

文学史の闇

オマエが負けたら、今度の文学賞にオレの名前を付けるんだぜ。いいぜ、よしやろうぜ、と始まった賭け麻雀、ジャンゴロ擬（もど）きの直木三十五に難なくひねられて大負けした菊池寛。といった遣り取りから『直木賞』が決まったという、文学史の暗い闇。直木三十五、その作品にいま陽はあたらず。 #twnovel

:

Chapter⑤

まゆつば

直木三十五と麻雀に興じた菊池寛、青天井ルールで負け金が巨額に。払いに窮した菊池、新設す

る文学賞に直木の名前を冠することで相殺にした。

小説家として時代に乗り遅れていた直木、後世は代打ち雀士として裏世界で暗躍、最期は和了牌（ロン牌）を掘んだまま絶命した、という逸話は眉に唾して。 #twnovel

高松中央図書館：菊池寛常設展示場でデジ撮（写真撮影OK）

再・推敲 #twnovel=Twitter Novel=（÷140字物語）=#ツイノベ

視聴ブースにて



視聴ブースにて

「それ犯人や！お、おいつ、血い～みるでえ！」

AV書架でVHSビデオの背表紙を追っていると、

傍らの視聴ブースからいきなり素っ頓狂な声。

どでかいヘッドホンを被（かぶ）った爺さんが興奮している。

画面を横からチラ見すると、

刑事モノかサスペンスといった、旧いモノクロの日本映画が流れている。

：

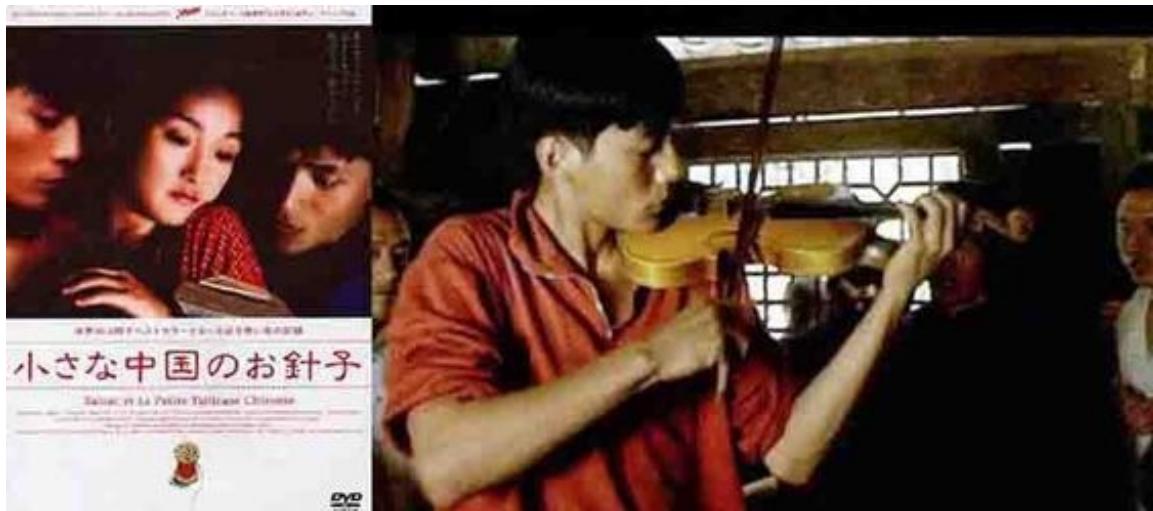
高松市中央図書館

掲載Photo：邦画『三十六人の乗客』（1957）

強盗事件が発生し、犯人が上信越方面に逃亡したという報が入る。気の弱い渡辺刑事は偶然、草津行のスキー・バスに乗り合わせていたため警戒を依頼される。乗客は35人。彼には誰もが怪しく思えてくるのだった。

Photoはネットから無断転載。不可の場合はご一報を。

ソナタK.216 and 図書館のお姉さん



ソナタK.216 and 図書館のお姉さん

洋画『中国の小さなお針子』（2002）。村人の前で弾かれたヴァイオリン演奏【モーツアルトのソナタ（毛主席を称えて）】のCDを探しに、高松市中央図書館へ。スタッフのお姉さんがライブラリー検索してくれて、

一枚のCDを差しだして。さて、その説明が*ジーニアス！クラシックの造詣の深さというか、スッゴイのひと言。イッキに尊敬しちゃいました。 *genius：非凡な才能

<https://www.youtube.com/watch?v=N-mA9OMP3DE>

...ヴァイオリン協奏曲第3番ト長調K.216、

3楽章のどれかに入っています。

...へえ、すごい、なんで分かるんです！？

...ええまあ。

...で、楽章って何でしたっけ？（恥）

....。

Photoはネットから無断転載。不可の場合はご一報を。

インプレッション

この28日間で、ツイートによって2,190,027件のインプレッションを獲得しました



インプレッション（ツイートを見た人）

自動的に落とされた一つのツイート（My bot 収蔵）に、ツイッターのパラレル世界みたいな向こう側から、唐突なモウレツさで反応があった。どこから拡散していったのか、『リツイート』『いいね』にさらに『リツイート』『いいね』がつながって。いちじゅうひゃくせんまん…・確認しなければならない程の桁数、わずかひと晩で1,000,000のインプレッション（ツイートを見た人）、3日目で2,000,000を超えてなおもジワジワと。どこまでいくのか、し、しらんヽ(‘o`;

トゥギャザー <https://togetter.com/li/1280430>

：

本たちが泣いているッ！

返却にきた図書館では『本たちが泣いているッ！』といった恒例の企画展が。特筆は校正マン（作家）を気取った落書き、ご丁寧に「私ならこう表現する」と、下手くそな文字で添削している。犯人像もプロファイリングし難い、愚行。

高松中央図書館

本が泣いている

マイブログ <http://axros2019.livedoor.blog/archives/16113323.html>

：

校正、校閲、添削でなく推敲擬（もど）き。読みづらいが、アガサ・クリスティの『名探偵ボ

ワロ』（雲をつかむ死）の数行を、コナン・ドイルの『シャーロック・ホームズ』に書き換える
というお莫迦な落書きか、これは。ワトソンとかシャーロックなどの文字がかろうじて読める。

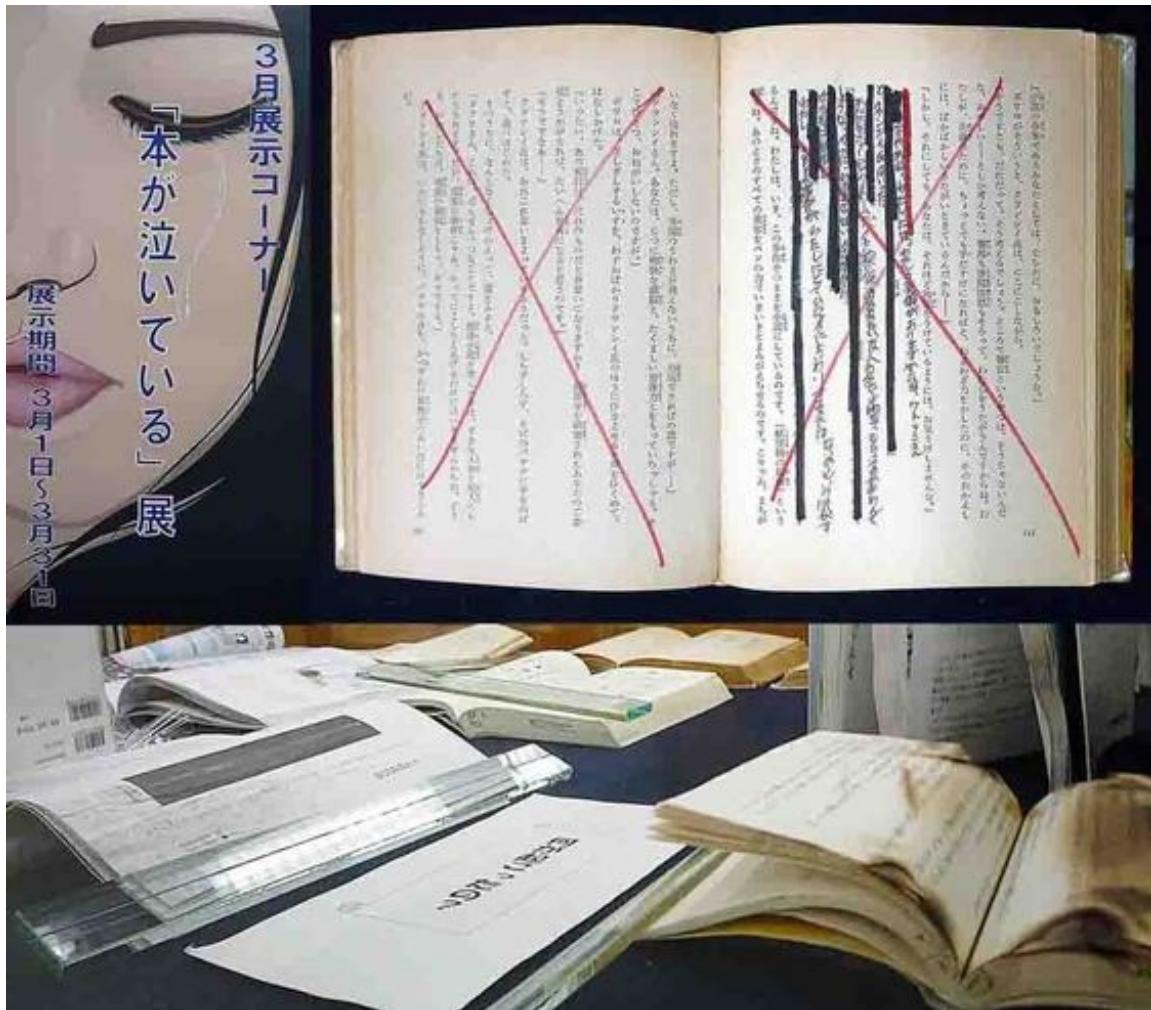
：

…それ、恥ずかしいなあ。

ぼそっと S A I。そうか地域住人の民度*の低さを晒されたようで。何と云っても『市立図書館、
の蔵書だからなあ。

* 住んでいる人の生活程度など。 * 図書本の落書き

本が泣いている



本が泣いている

全国一円に、春イチバンの生あたたかい風が吹きすさぶなか、

借りていた本を返しにやってきた図書館では、

『本たちが泣いているッ！』といった恒例の企画展が始まっていた。

二つの大きなガラス展示箱には、

千切る、書く、消す、焙（あぶ）る、漬ける、晒（さら）すなど、

なにこれ！？といった、

本たちが受けた残虐非道な受難の数々が、所狭しと並べられている。

なかでも特筆は、犯人像もプロファイリングし難い、

校正マン（もしくは作家の添削）を気取ったお莫迦な落書き、

ご丁寧に「私ならこう表現する」*と、下手くそな文字で添削された本。

方や、鉛筆でいたずらされた落書き本には、

「1ページずつ確認してケシゴムで消します」とのメモが添えられていたが、

鉛筆でなくサインペンだと、どういうことに!?

・・・というかそういった作業を黙々とこなしている、

図書館員のお姉さんの苛立つ胸中を慮（おもんばかり）ると、

帰途、ちょっと気分が重くなったぞ。

*右上の蔵書の落書きは、校正、校閲、添削でなく推敲擬（もど）きか。読みづらいが、アガサ・クリスティの『名探偵ポワロ』（雲をつかむ死）の数行を、アーサー・コナン・ドイルの『シャーロック・ホームズ』に書き換えるという落書きのようだ、これは。ワトソンとかシャーロックなどの文字がかろうじて読める。

:

*サンデー毎日に、『校閲至極』という連載コラムがある。輪転機をまわす前の切羽詰まった時間内に、言葉遣いを奮闘チェックする様子が綴られている。・・・と書いたものの、校閲と校正、何がどう違うのか分かっていない。

:

高松中央図書館 2018.3

インプレッション（マイブログ）

<http://axros2019.livedoor.blog/archives/16113392.html>

米がない



コメがない

「ちょっと遅れとるんや、予約時間に。いま来たんや」

突然、爺さんのダミ声が耳に入ってきて、コミックを読む手を止めた。

図書館2階フロアに入ってすぐのコミックコーナー*には、

ふた抱えはありそうな円柱を背に設えられた、

休憩と読書を兼ねた丸いソファが2つ。

その内の一つに入り口ドアを背に座っていた。ちなみにこのソファ、

柔らかく適度な反撥があって座り心地がよい、円柱も背中に優しい。

ちびっ子から老人までさまざまな人たちが腰を下ろして、

コミックや貸出受け付けを済ませた雑誌などを読んでいるが、

女子高生やOL風の女性が座っているのを見たことがない。

その爺さんの無遠慮なもの言いは、

誰かと話している、ケータイでも掛けているのかといった声。

座った角度から姿力タチは見えなかつたが、

ひどく強烈なキャラの爺さんがいるもんだな！と、驚いていた。

「10分ぐらいかの、遅れたんは。まだいけるやろ」

などと喋り声が移動して、突きあたりの受付へ。

その受付の女性館員（お姉さん）に、トンでもないことを言い始めた。

「コメがひとつもないんや、水でもええんやけどな、コメがないんや」

ケータイを掛けているのではなく、2階の自動ドアから入るなり、

受付のお姉さんに向けてひときわ大きい声で話しかけていたのだった。

声が大きいのはおそらく地声、お姉さんに近づいてもトーンが変わらない。

「なんか食うもんないか、ないか。ないんなら、しゃあないな」

「ほんまにコメがないんや、ひとつ粒（つぶ）も。どーしよか、なあ」

その間お姉さんは、いつものことだからと、困った愛想笑いをしながら

「ええ、まあ、そう、はい」などと適当な受け答えをしているようだった。

何のリアクションも期待できそうにないのでそれ以上喋ることもなく、

「そや、映画予約しとったんや」と、

視聴予約をしているA Vコーナーへ歩いて行ったようだ。

爺さんの声と気配が、私の周囲からフェードアウトして静かになった。

：

でまたある日、A V書架でビデオの背表紙を眼で追っていると、

視聴ブース*から素っ頓狂な声。

「それ犯人や！お、おいっ、血い～みるで！」

頭の両サイドをすっぽりと覆うほど大きいヘッドホン*をかけた、

かなり年配の小父さんが映画を観ながら興奮している。

画面を横目でチラ見すると、

刑事モノかサスペンスといった古い日本映画（VHS）が流されていた。

しかしあ年々、70歳をとうに過ぎたようなお年寄りが増えているなあ。

なかには仲良くDVD映画や音楽CDを借りる老夫婦もいて、微笑ましくもあり。

：

*高松市中央図書館（写真）

*コミックコーナー

簡易書棚がいくつかあって、何冊か歯抜けになった全巻コミックや単行漫画本などがストックされている。やはり別格は手塚治虫、書棚一つを占めている。

*視聴ブース

DVDはもとより、VHSテープ、レーザーディスクまで観賞できる。モニターはCRTタイプ（ブラウン管）、椅子はパイプ製。

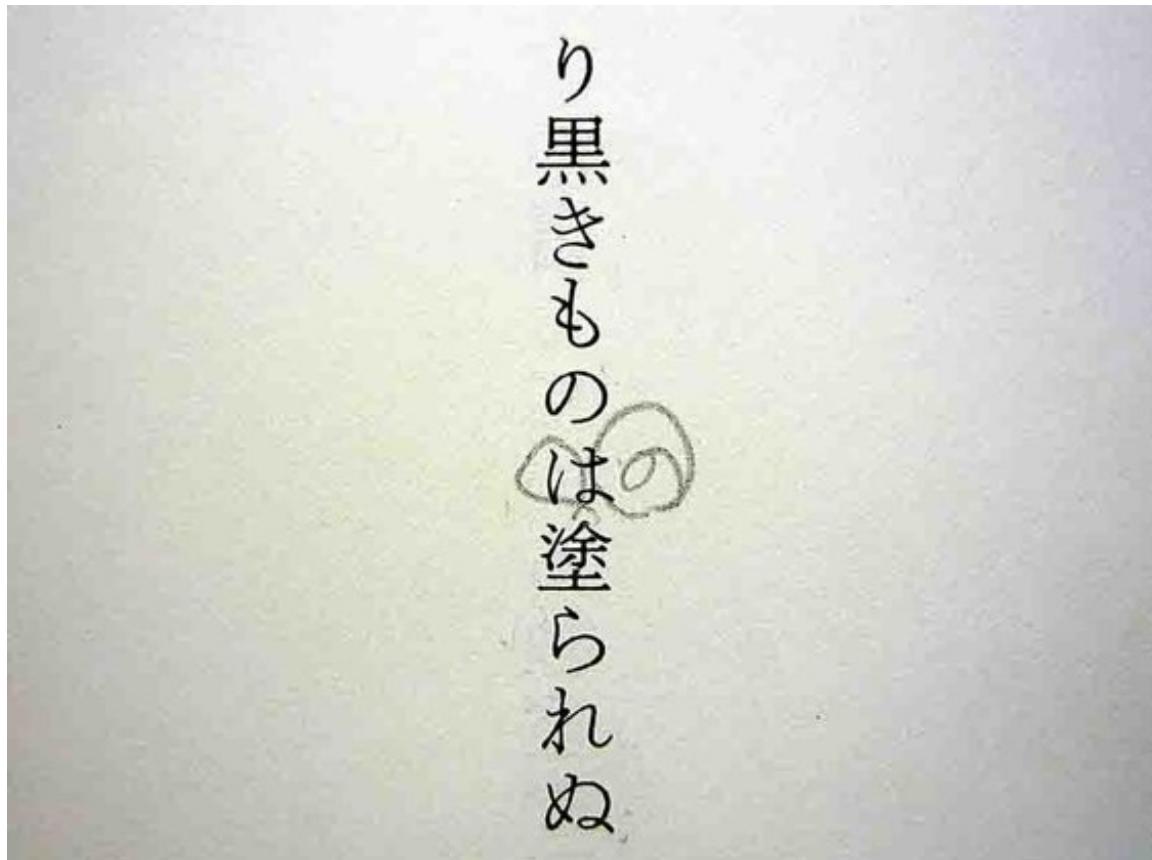
*ヘッドホン

やたら大きいヘッドホン。耳にタイトで音が漏れない。オーディオ専用というか、海外にある射撃場の耳栓のようだ。

Based on a True Story

Photoはネットから無断転載。不可の場合はご一報を。

民度*



なに、添削でもしているつもりか!?

一点に戻らんとする心あり墨より黒きものは塗られぬ

歌集『サラダ記念日』（俵万智 1987）

高松市中央図書館蔵

*みんど【民度】

民度（地域住人の文化水準）が問われる、公共図書への落書き

:

初めて歌集を開いた日 <https://blogs.yahoo.co.jp/axros03/48229706.html>

図書館で隠し本



図書館で隠し本

図書館でマナー違反の不埒（ふらち）な行いといえば、

ページを破る、落書きをする、蛍光マーカーでアンダーラインを引く。

これがC DやD V Dだと無神経な取扱い、

さらに子どもの遊び道具にしたような酷いひっかき傷など。

本や視聴覚メディアたちが理不尽な受難に遭っているのは、

もう慣れっこになっている。しかし図書館で『本を隠す』人がいるとは初耳。

他の人に貸し出されると自分が読めないといった理由からだろうが。

いずれにしろ公共ライブラリーに自分だけの秘密の本棚を抱えるわけだ。

想像するだけで、性根が賤しい輩（やから）、

しつけの悪いガキなどのフレーズが思い浮かんでくる。

しかし一体どこに本を隠すのか、自分のためだけに取り置く場所は。

行きつけの図書館を推察してみるが、

視聴覚コーナーばかりで書架にはほとんど足を踏み入れないので、

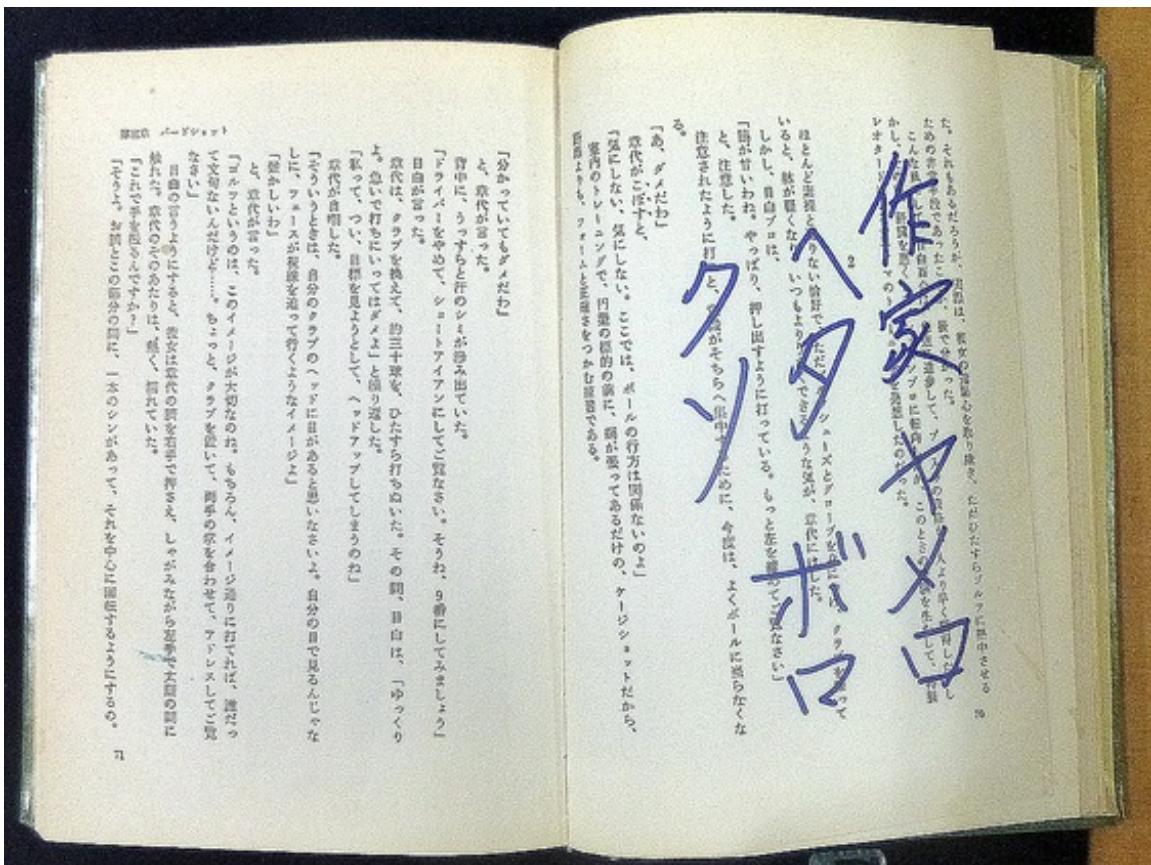
棚の奥まったスペースしか思い浮かばない。

それとも手がとどきにくい書架の上部とか。

・・・こんど司書の女人に訊いてみようか、さりげなく。

Photoはネットから無断転載。不可の場合はご一報を。

オトナもコドモも何やってるの



オトナもコドモも何やってるの

他人さま（図書館所蔵）の本に、なんちゅう落書きを！

文字を読むと、女子プロゴルファーの女性が、

知人の女性にレクチャーをしている下り、どうやら小説のようだった。

落書きの主の逆鱗に触れそうな稚拙な表現に思えた。

三文小説か、ふむむう～。

：

本だとページを破り取る、落書きするは当たり前。

中には全ページの文章にアンダーラインを引く、

水に浸す、焼け焦げを付けるなど。

DVDやCDだと故意のひっかき傷、

知人から聞いた話だが円盤ごっこで投げ合って遊んだりと、

損傷の方が小さな子どもたちの仕業（しわざ）と覺しき遣り口が。

：

本の借りだしは図書カード1枚で15冊、家族で2枚つくるとその倍だから、

ヤンママらしい婦人がカゴにいっぱいの本を詰めている姿をよく見かける。

ショッピング図書館を利用するので、

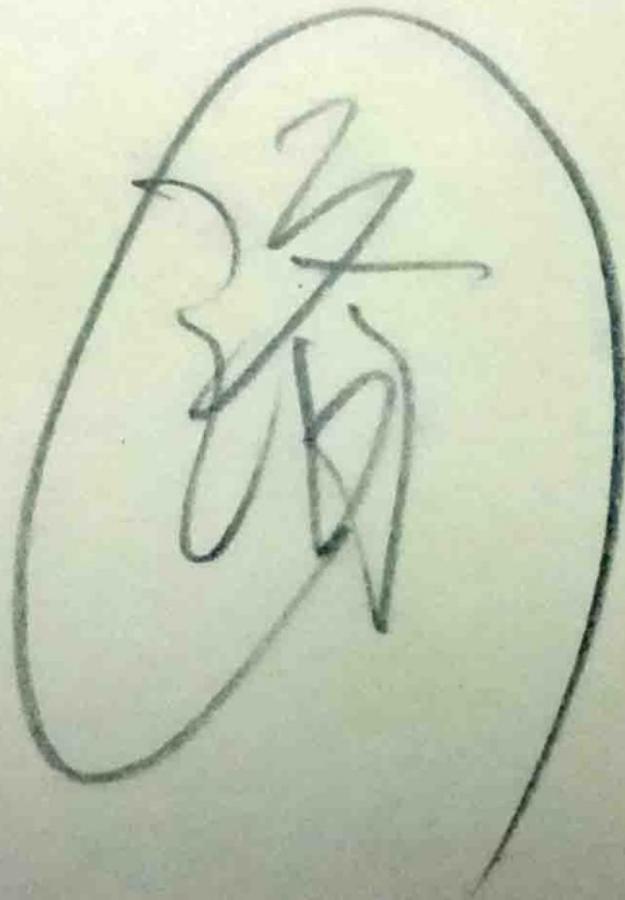
本やDVDを借りて帰って唖然とさせられることがたまにある。

：

高松中央図書館 企画展『本は泣いている』

*画面右下をクリック拡大すると（小説？が）読める。

イラッ！



イラッ！

図書館ライブラリー、サザエさん、藤子不二雄、手塚治虫、つげ義春など、

漫画単行本の“見返し”に書き込みされた“済”的讀了サイン。

イラッ！とくる拙（つたな）い文字に何度遭遇したことか。

鉛筆なのがまだ救いだが・・似たような年代なのか、

男性だろうなとプロファイリング。

で、書き込みされたページをどう呼べばいいのか、

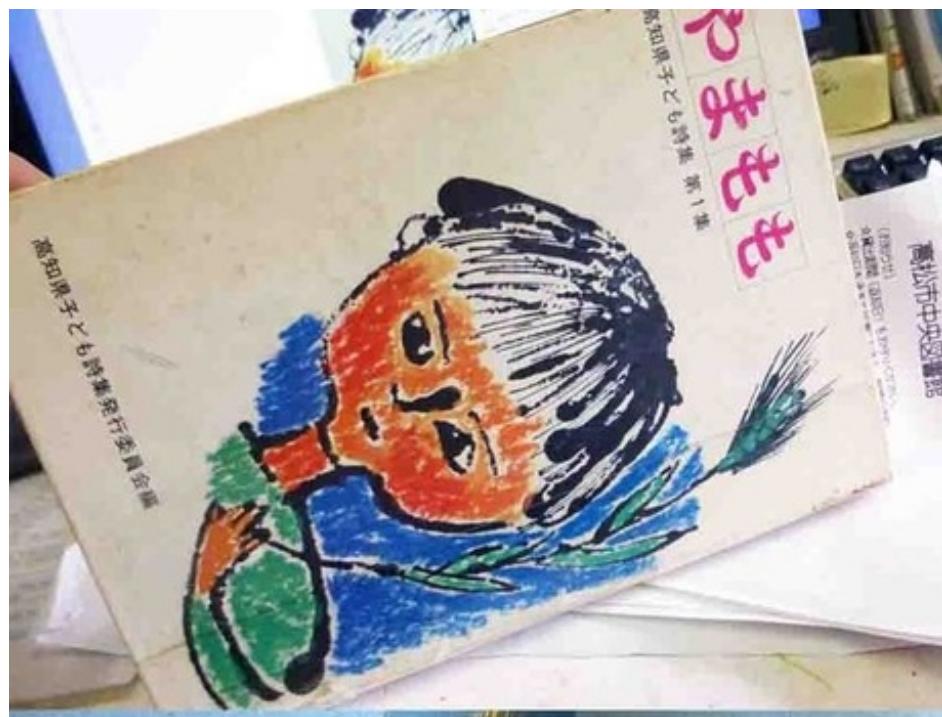
ネット検索してみたところ“見返し”ということが分かったが、

本には逐一名称が付けられていることも・・・。

この部分の名称

http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/osaka/book_bui.html#mikaeshi

40年前の一篇の詩



うんこが もれたこと
立川小二年 永野

かえりしに
「ぶちゅう。」
と 音が した。
おならかと 思つた。
また、ずんずん かえりよつたら、
うんこが かえりよつたら、
「ぶつん。」
ともれた。
きゅうに もれたので、
しりが おもかつた。
そして、
またを あけて
ぶらぶら かえつた。

40年前の一篇の詩

久しぶりに小学生たちが地の言葉で綴った詩、高知県子ども詩集『やまもも』が

読みたくなって図書館で予約して借りてきた。

高知弁だとなぜだか活字が、気持ちにスムーズに沁みてくるのだ。

この詩集は

「高知市立図書館」と「高松市立図書館」の間で『相互貸借』されている。

とすると高松からも菊池寛賞受賞作の朗読CDとか、

郷土資料などが往き来しているのかと。

受付にお願いしてから一週間足らずでメールのお知らせ、

届けられた『やまもも』を手にとって表紙を見ると、なんと、第一集だったよ！

1977年（S52）発行、貸出表の最初には52.9.27のスタンプが。

掲載はいまから39～40年前の小学生の詩、

この時2年生だともう50歳近いということになる。

この小学生が昔の詩集を読む機会があるとすれば、

懐かしさを通り越して恥ずかしがったりして・・・はともかく大事に読まんと。

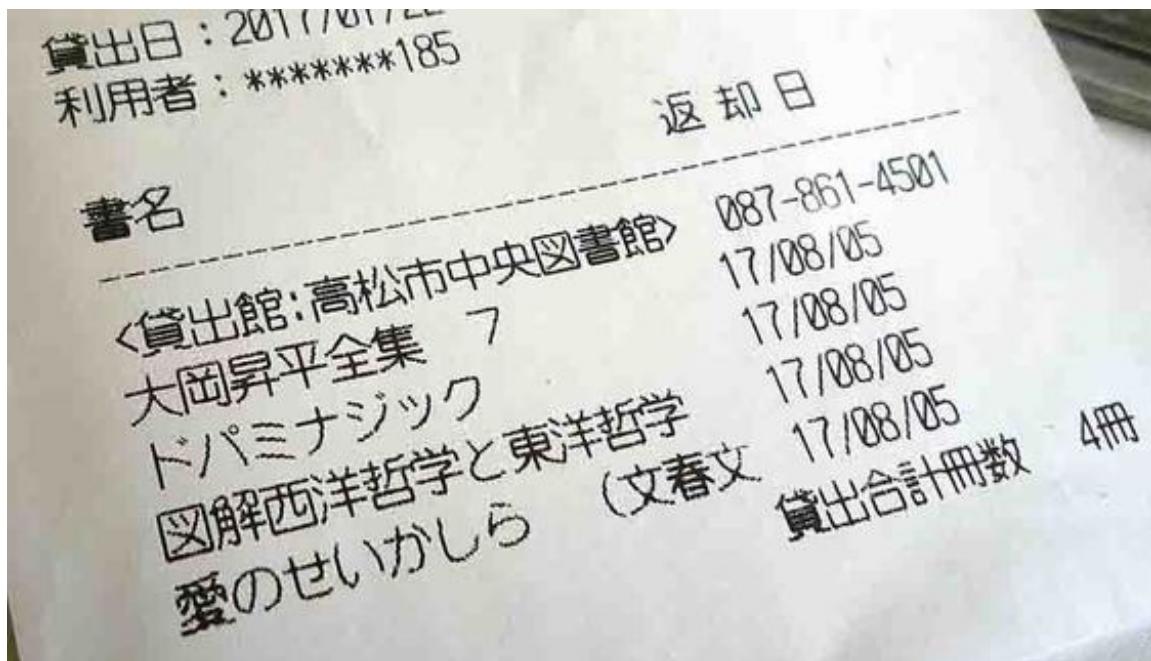
：

最初に目に留まった、とても素直で

私にとって『デジャブ感』（既視感）*がある一篇の詩をチョイスしてみた。

* というか、朧気（おぼろげ）な記憶の断片が甦（よみがえ）る、といった。

内田春菊の漫画と哲学本を借りた某氏



内田春菊の漫画と哲学本を借りた某氏

ちょっとかなりエロイ、

内田春菊のコミック本『愛のせいかしら』を開いてパラッとめくった。

巻末あたりに、夏盛りごろの図書館の貸出票か挟んだままにしてあった。

この貸出票の主はどんな人物だろ、

プロファイリングしようかという気が・・・とその前に

そもそも内田春菊とは何者？ネット調べすると、

内田春菊（58歳）は漫画家・作家・俳優・映画監督などと活動多彩。

意味不明なタイトルの『ドパミナジック』*も彼女の短編小説集だった。

大岡昇平はいわずもがな『野火』の原作者として有名。

『図解：西洋哲学と東洋哲学』は、

面白可笑しく書かれたソフトカバー単行本と思われた。

というか先ほど、返却ついでに『図解：西洋哲学と東洋哲学』を借りてきた。

さて、この貸出からどんな人物が思い浮かぶ？

：

*ドーパミンを捩（もじ）って、それらしく綴った造語

アマゾン書説『ドパミナジック』 生活の中に開いた「萌の穴」にうっかり落ちると、ドーパミンがあなたを支配し、動悸、食欲不振、不眠、社会性の喪失、根拠なき幸福感などが襲いかかります。これは、落ちないための12の短編小説です。

Photoはネットから無断転載。不可の場合はご一報を。

一反木綿



一反木綿

図書館で夏特集・・・怪談本にホラー映画。

「ご用ですかぁ？」と振り返った受付のお姉さんの顔がないっ！

その頭上にはエアコンの風にそよぐ『一反木綿』が

ぎえーーつ！

：

高松市中央図書館

11月の記念日



11月の記念日

11月は記念日が多いね！と、

朝方TimeLineに記念日が10個近く列記されていた。

夕方になって図書館*に行くと、展示ケースが模様替えしていた。

『11月の記念日』のタイトルで、数コマに分けて展示してあった。

記憶にある限り初めての企画だ。

なかでも3日が『漫画の日』、転じて『トキワ荘の日』だったことを知った。

図書館員のお姉さんがクレヨン書きした漫画家の似顔絵がいい！

でさらにその夜読んだ、

週刊文春：連載エッセイ『夜ふけのなわとび』（林 真理子）には、

十一月一日は本の日、今年からそうなったのである。

「みんなで十一月一日、本やさんに行こう。

買わなくてもいいから、とにかく行こう」と書かれてあった。

* 高松中央図書館